

ブラジル人幼児による「～する」構造習得に関する 予備的調査

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 久野, 美津子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00006608

ブラジル人幼児による変化表現「～する」構造習得に関する予備的調査

久野 美津子

【要 旨】

ポルトガル語を母語とする幼児2名の20ヶ月間の発話データを基に変化表現「～する」構造について習得の特徴を調べた。その結果、主に次のような特徴が見られた。(a)「名詞＋にする」構造では習得初期に「に」の脱落が観察され、その後「に」が出現してからも脱落は続いた。「に」の過剰使用も観察された。(b)「ナ形容詞＋にする」構造では適格な表現の他に「に」の脱落も観察された。(c)「イ形容詞＋くする」構造では形容詞の活用の誤りや「に」の過剰使用が観察された。過剰使用が観察された時期は「名詞＋にする」「ナ形容詞＋にする」構造で「に」が使用されるようになってからであった。(d)「動詞＋ようにする」構造の出現時期は他の構造に比べ遅かった。以上の特徴から、「～する」構造の習得には格助詞「に」の習得が深く関わっていることや、語彙の品詞を識別し各品詞に応じた接続方法を覚えていくことが彼らにとって困難であることがうかがえた。

【キーワード】変化表現、「～する」構造、習得の特徴、ブラジル人幼児、格助詞「に」

1. はじめに

本稿は第二言語(L2)としての「～する」構造(「名(詞)＋にする」「ナ(形容詞)＋にする」「イ(形容詞)＋くする」「動(詞)＋ようにする」)習得に関する予備的調査である。同構造は変化を表す表現として一般に初級で取り上げられる文法項目である。同構造のうち「名＋にする」構造に関しては、格助詞「に」の研究の中で触れられることもあり、「に」が定着しにくいといった報告もある(西村1987、生田・久保田1997、竹中2001)。ただし、これらの報告は「～する」構造の習得に焦点を当てたものではないため、その習得の特徴は明らかではない。さらに、「イ＋くする」構造についてはこれまで報告がないと思われる。そこで、本稿ではブラジル人幼児2名の発話データを基に、「～する」構造の発話例をできるだけ記述し、その習得の特徴を記すことによって、同構造の体系的な習得過程解明の基礎となる資料を示したい。

2. L2 先行研究

格助詞「に」の習得研究の中には、「変化」「選択」の用法として「～にする」に触れているものもある(西村1987、生田・久保田1997、竹中2001)。西村(1987)は初級日本語コースの学習者達に行った小テストや定期テストのデータを基に、様々な助詞の誤りの傾向を分析した。そして、助詞の定着がよくないものの一つとして「～にする」の「に」をあげている。また、生田・久保田(1997)は上級レベルの成人学習者50名(国籍は17カ国、平均年齢は36.1歳)を対象に、格助詞を選択させる形式でテストを行った。その結果、割合は少ないが(50人中3人)、「に」とすべきところを「を」あるいは「から」と誤選択した例が報告されている(例：*息子を医者 を／から しようと思います)⁽¹⁾。

一方、竹中(2001)はL2学習者2名の助詞の使用状況を調査した。そのうち、タガログ語を母語(L1)とする児童1名(11歳7ヵ月)の来日後約1年間の発話資料を基にした表によれば、「選択」を表す「に」が観察されたのは来日後38週目以降であり、その出現時期が存在場所や到達点など他の用法を表す「に」に比べて遅いことが読み取れる。しかし、詳細は明らかではない。

これらの先行研究から、「～する」構造のうち少なくとも「名+にする」については、L2学習者にとって習得が容易でないことが推測される。しかし、これら断片的な報告から「～する」構造の体系的な習得の特徴を知ることは困難である。

3. L2 幼児の調査

3-1 調査方法

対象児はポルトガル語をL1とするブラジル人幼児2名(兄Y児、妹K児)である。彼らはブラジルで生まれ、Y児が2歳0ヶ月、K児が11ヶ月の時に両親と来日した。Y児が4歳7ヶ月、K児が3歳6ヶ月の時、静岡県掛川市内の保育園に入園した。入園当時、両児とも日本語が全く話せなかった。調査資料は彼らの保育園入園直後から約20ヶ月間(Y児:4歳7ヶ月～6歳2ヶ月、K児:3歳6ヶ月～5歳1ヶ月)に得られたものである。原則として1週間に1度、筆者が保育園を訪れ発話や状況等を記録した。発話は全てテープ録音し、後に文字化した。分析対象とした発話は自発的発話である。

分析対象とした文法項目は、変化を表す「～する」構造である。寺村(1982、1991)を基に「働きかけと変化の複合」を表す動詞(例:する、決める、選ぶ、塗る)を用いた表現を対象とした。ただし、「決める」「塗る」などの意味で「する」「やる」が用いられた場合や、「ちょっと静かに」のように動詞「する」が発話されていない場合も、状況から発話意図が明らかであれば分析対象とした。(1)は各構造とその用例である。

- (1) a. 「名+にする」構造 (例:紙を半分にする。朝食はパンにする。)
- b. 「ナ+にする」構造 (例:部屋を綺麗にする。うるさいから静かに。)
- c. 「イ+くする」構造 (例:音を大きくする。PCを使えなくする。)
- d. 「動+ようにする」構造 (例:野菜を食べるようにする。酒を飲まないようにする。)

擬態語を用いた表現(例:くちゃくちゃにする)は「名+にする」構造に含めた⁽²⁾。便宜上、1ヶ月ごとに発話回数を数えた。回数の数え方について、同時に全く同じ表現が2回以上繰り返された場合(例:赤にする 赤にする 赤にする。)は2回とした。また、表記について、「名+にする」「ナ+にする」構造の義務的生起文脈(OC)で「に」が脱落している場合は「*φ」と記した。

3-2 ポルトガル語での表現

ポルトガル語では、例えばtornar、fazer、ficarなど様々な動詞を用いて「～する」構造に相当する表現を表すことができる(日向1994、コエーリョ・飛田1998)。そして、前

置詞が必要かどうかは、動詞の種類や、動詞と共に用いる語彙の品詞の違いによって異なる。表1にはポルトガル語による表現例を記した。下線部の語は前置詞である。

表1 ポルトガル語での表現例^③

構造	前置詞を伴わない表現	前置詞を伴う表現
名詞 +にする	Vou escolher o rosa. 選ぶ ピンク (ピンク色にする)	Vou ficar <u>com</u> o rosa. 取る で/と ピンク (ピンク色にする) Vou cortar o pão <u>ao</u> meio. 切る パン に 半分 (パンを半分にする)
ナ形容詞 +にする	Fique quieto. して 静かな (静かにして) Vou limpar meu quarto. 綺麗にする 私の 部屋 (部屋を綺麗にする)	Fique <u>em</u> silêncio. して に 沈黙 (静かにして)
イ形容詞 +くする	Vou aumentar o volume. 増す 音 (音を大きくする)	/
動詞 +ように する	Procuro comer de tudo. 努める 食べる 何でも (何でも食べるようにする) Vou tentar não me atrasar. 試みる ない 遅れる (遅れないようにする)	Trato <u>de</u> comer de tudo. 努める 食べる 何でも (何でも食べるようにする)

表1のように、「～する」構造に相当する表現方法は様々であり、日本語の形式と必ずしも一致しない。そのため、学習者は日本語の語彙の品詞を一つずつ覚えるとともに、各品詞に対応した接続方法を新たに覚える必要が生じる。ポルトガル語では一般に「イ+くする」構造を表す時、「に」に相当する要素は必要ない。そのため、仮に「イ+くする」構造で「に」が観察された場合、それをL1転移で説明することは難しく、「～する」構造の習得過程における発達上の誤り (developmental error) の可能性が高いと思われる。また、「名+にする」「ナ+にする」「動+ようにする」構造の場合、ポルトガル語では「に」に相当する前置詞が伴う表現と伴わない表現とが存在する。そのため、これら3つの構造では、L2学習者の習得過程の初期段階から「*φ」と「に」のいずれも観察される可能性があると思われる。

3-3 調査結果

調査の結果、Y児には「名+にする」「ナ+にする」「イ+くする」構造が、K児には「名+にする」「ナ+にする」「イ+くする」「動+ようにする」構造が観察された。それぞれの結果について、表および発話例を記しながら見ていく。

3-3-1 Y児の結果

Y児の各構造の出現時期と発話回数は表2のとおりである⁽⁴⁾。Y児の場合、「名+にする」「イ+くする」両構造のOCは7ヶ月目に出現した。「ナ+にする」構造では5ヶ月目に「しずかに」という発話 appeared が、「する」を伴った「しずかにして」は15ヶ月目になって出現した。誤りは「名+にする」構造で「*φ」が観察された他、「イ+くする」構造で「に」の過剰使用やイ形容詞の活用の誤りが観察された。イ形容詞の活用の誤りは2種類あり、1つはイ形容詞を活用させない誤り（「*い+する」）、もう1つはイ形容詞の語幹だけを用いた誤り（「*語幹+する」）であった。「動+ようにする」構造は観察されなかった。

表2 Y児の「～する」構造の使用状況

構造\月数 (年齢)	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
	5;0	5;1	5;2	5;3	5;3	5;4	5;5	5;6	5;7	5;8	5;9	5;10	5;11	6;0	6;1	6;2
*名+φ+する	-	-	3	-	-	1	-	1	2	1	2	-	-	1	-	-
名+にする	-	-	-	-	-	-	4	-	-	5	8	1	5	6	1	6
ナ+に	1	-	2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-
ナ+にする	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	-
*語幹+する	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イ+くする	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	3	1	1	-
*い+にする	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
*い+する	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1

Y児の発話例のいくつかを構造別に見ていく。発話例中の<>には発話時の状況を記し、()には発話内容を明らかにするため筆者が言葉を補った。発話例最後の()内の数字は発話時の保育園滞在月数(～ヶ月目)である。

3-3-1-1 「名+にする」構造の結果

「名+にする」構造では7ヶ月目からOCが出現したが、10ヶ月目まで「に」の出現はなく「*φ」のみの発話が続いた。(2)はこの時期の発話例である。

(2) 「名+にする」構造：7～10ヶ月目の発話例

- a. <自分のおやつをどの友達にあげるか迷っている> *だーれー (に) しようかなー? (7)
- b. <隠れんぼで鬼役になり、友達の隠れ場所を探す> * (隠れ場所は) どこ (に) したのー? (7)
- c. <遊びのグループに自分も仲間として入れて欲しい> なかまいれてー。<観察者：Y君どっちの(グループの)仲間(になりたい)?>*どれ (に) しようかなー。(10)

11ヶ月目以降になると「に」が観察されるようになった。ただし、「に」の出現以降も「*φ」は消失せず断続的に観察されていた。発話例(3)は11ヶ月目以降の発話例である。このうち(3c) (3d)はいずれも「何」という言葉を用いた発話例であるが、13ヶ月目には脱落していた「に」が(例：*なにしよう)、14ヶ月目には観察されている様子うかがえる(例：なににしよう)。

(3) 「名+にする」構造：11ヶ月目以降の発話例

- a. <ドッチボールの最中、白線の外側に足をつきながら> こっちにしよう。(11)
- b. <お店屋さんごっこ> 1こちょうだい。3こちょうだい。*3こ(に)しよう。(12)
- c. <お店屋さんごっこ> *えっと なに(に)しよっかな?100えんですよ。(13)
- d. <絵を描きながら> なーなににしようか? Nちゃんのにしようか。(14)

また、同じ言葉を用いた表現でも「に」と「*φ」が同時に観察される場合があった(例：*ここする、ここにする)。(4a) (4b)は14ヶ月目の同日に観察された「ここ」を用いた例、(4c) (4d)は15ヶ月目の同日に観察された「反対」を用いた例である。これらの例ではY児が「に」を使ったり脱落させたりしており、「に」の使用が定着していない様子うかがえる。

(4) 「名+にする」構造：「*φ」と「に」が同日に観察された発話例

- a. <どこに座るか空いている席を探しながら> *ここ(に)しよう。(14)
- b. <本をめくりながら、読んでほしいページを探している> じゃあここにしようか、じゃあここにする。はい、よびて。(14)
- c. <観察者におんぶしたいので、反対を向いてほしいと頼んでいる>
*ちょっとはんたい(に)やってー、はんたい。いくよー。(15)
- d. <(4c)と同じ発話状況>
こんどカメさんにとって。ちょっとはんたいにし(て)、はんたい。(15)

3-3-1-2 「ナ+にする」構造の結果

「ナ+にする」構造で観察されたナ形容詞は「静か」のみであった。5～13ヶ月目に「しずかに」が観察され、その後15ヶ月目になって「しずかにして」が観察された。(5)は発話例である。「しずかに」という表現は先生や園児達が「静かにしてください」「静かにしましょう」などの意味でよく使っており、Y児が「しずかに」を1つの固まり表現として覚えていた可能性も考えられる。

(5) 「ナ+にする」構造の発話例

- a. <観察者：蛙(の絵)だね> カエルのうたが・・<と大きい声で歌いだす>
<観察者：大きい声(出しちゃ)いや> ちいさい。しずかに(する)。(5)
- b. <大きい声で騒いでいる友達を注意している> しずかーにー(して)。(7)

- c. <テープレコーダーに録音された声をイヤホンで聞きながら> しずかにして、これが、こうやってやるから きこえてるー。(15)
- d. <テープレコーダーを聞きながら> しずかにしてよ、きこえる ぼく (の声が)。(15)

3-3-1-3 「イ+くする」構造の結果

「イ+くする」構造のOCは7ヶ月目に1度出現したが、この時の発話はイ形容詞の語幹のみを用いた誤りであった。その後8~13ヶ月目には観察されず、14ヶ月目以降に再び観察されるようになった⁽⁶⁾。同構造での発話は全部で9回あり、そのうち6回は「はやく」を用いた適格な表現、残りの3回は他の形容詞を用いた誤りであった(例:*つめたする、*ちいさいにする、*おおきいする)。(6)は同構造の発話例である。これらの例からは、Y児にとってイ形容詞の活用や接続方法が困難だった様子がうかがえる。

(6) 「イ+くする」構造の発話例

- a. <観察者:(滑り台に水を流すと)皆冷たいって言うよ> あそこは?*つめたする?(7)
- b. <ハンドルで速度調節できる遊具のスピードを> はやくするー。(14)
- c. <カセットテープの音量を> *ちいさいにする。(15)
- d. <ハンドルで速度調節できる遊具で遊んでいる>
ゼーンゼーンはやくないなー。ぼく もっと はやくしてあげる?(19)
- e. <友達を高く抱っこしようとしている> *もっともっと おおきいしてあげる。(20)

3-3-2 K児の結果

K児の各構造の発話時期と発話回数は表3のとおりである。OCの出現時期は「名+にする」構造が7ヶ月目、「ナ+にする」構造が8ヶ月目、「イ+くする」構造が14ヶ月目であった。「動+ようにする」構造も19ヶ月目に観察された。「名+にする」「ナ+にする」構造ではいずれも8ヶ月目に「に」が観察された。誤りは「名+にする」構造で「*φ」と過剰使用が、「ナ+にする」構造で「*φ」が見られた。また、「イ+くする」構造ではイ形容詞を活用させない「*い+する」の他、「に」の過剰使用も見られた。

表3 K児の「~する」構造の使用状況

構造\月数 (年齢)	6 3;11	7 4;0	8 4;1	9 4;2	10 4;3	11 4;4	12 4;5	13 4;6	14 4;7	15 4;8	16 4;9	17 4;10	18 4;11	19 5;0	20 5;1
*名+φ+する	-	2	-	-	1	2	1	-	1	5	2	-	-	1	2
名+にする	-	-	11	13	22	8	8	5	13	16	4	11	11	4	8
*名+ににする	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-
ナ+に	-	-	2	1	-	-	-	-	1	5	1	3	4	-	1
*ナ+φ+する	-	-	-	-	-	1	-	-	2	-	-	-	-	-	-
イ+くする	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	2
*い+する	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
*い/く+にする	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1
動+ようにする	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1

以下では各構造別に発話例を見ていく。

3-3-2-1 「名+にする」構造の結果

「名+にする」構造では7ヶ月目に「*φ」が観察された。(7)はその発話例である。

(7) 「名+にする」構造：7ヶ月目の発話例

＜広告の花を見ながら、どの花を切り抜くか選んでいる＞ *な-に (に) しようかな? な-に (に) しようかな? <観察者：チューリップだね> ちーがーう チューリップじゃな-い。(7)

翌8ヶ月目から「に」が継続的に観察されるようになった。しかし、「に」出現後も「*φ」は消失せず断続的に観察されていた。(8)は8ヶ月目以降の発話例である。Y児と同様K児の場合も、同じ言葉を用いているものの、誤りと適格な表現とが同時に観察される例があった。(8d)と(8e)はいずれも「ばらばら」を用いた発話例であるが、「に」の過剰使用だけでなく適格な発話も同日に観察されていた。また(8h)は「どれ」という言葉を用いた表現であるが、「に」と「*φ」とが同時に観察されていた。これらの例からは、K児が「に」を試行錯誤しながら用いている様子や、「に」の使用が定着していない様子などがうかがえる。

(8) 「名+にする」構造：8ヶ月目以降の発話例

- a. <ペンを選んで> これにしよう。(8)
- b. <塗り絵の時、ペンの色を選ぶ> ピンクにしよう。(9)
- c. <鬼の絵の髪をピンクで塗りながら> (この鬼を) ママにしよう。(10)
- d. <おもちゃの板を整理しないで箱にしまう> *ばらばらににやっちゃった。(12)
- e. <パズルを壊した> ばらばらにしちゃった。(12)
- f. <粘土消しゴムを洗濯ばさみに挟んで平らにした> ぬりけし ペっちゃんこにやっちゃった、だってここ(洗濯ばさみに) やったもん。(14)
- g. <先生がパンを半分に割った> *はんぶん(に) したの。はんぶんはいつた。(15)
- h. <アイシャドーの色を選びながら友達と話している> あたしきいろにしよう。ちがう、これじゃない、つづき-、まって、ここやったら-、これにして-、どれにする、どれにする? *どれ(に) し(よ) っかな-? <友達：これにする?> いや、あお、あお、かわいくないもん、みどり。どれにしようかな-? (15)
- i. <横向きの靴を縦向きに直しながら> *たて(に) やるんだよ うわぐつは-。(16)

また、「ぐちゃぐちゃ」「くちゃくちゃ」という言葉を用いた表現の場合、初めは「*φ」のみが観察されていたが(例：*ぐちゃぐちゃやる)、その後徐々に「に」が使用されていく様子が見られた。(9)はその発話例である。

(9) 「名+にする」構造：「ぐちゃぐちゃ / くちゃくちゃ」を用いた発話例

- a. <友達Lがペンで絵をぐちゃぐちゃに塗る様子を、K児が真似ながら観察者に伝える>*Lちゃんはぐちゃぐちゃ(に)やる。みて。<観察者：Lちゃんがやるの？>
>ちがうよ。あたしがあたしやるじゃん。(11)
- b. <粘土で作った顔をつぶして、それを観察者に見せている>
もうやったんだ、みーて、ぐちゃぐちゃに。*ぐちゃぐちゃ(に)やった。(12)
- c. <自分で塗った絵の説明を観察者にしている>
*くちゃくちゃ(に)ぬっちゃった、ふさふさ。うそだよー、きれいにぬった。(15)
- d. <おやつ時間> わたし(お煎餅を)ぐちゃぐちゃにしてないもん。(17)

3-3-2-2 「ナ+にする」構造の結果

「ナ+にする」構造では8ヶ月日以降、「に」を伴った適格な発話が断続的に観察された。ただし、11ヶ月目と14ヶ月目には「*φ」も観察された。(10)は発話例である。このうち(10a)(10b)では「じょうずにやった」「きれいにやる」のように「に」が観察されていたが、その数ヵ月後の(10c)(10d)では「*じょうずやった」「*ぬってきれい」のように「に」が脱落している。これらの例では一旦観察された「に」が再び脱落しており、「に」がすぐには定着していない様子が見える。

(10) 「ナ+にする」構造

- a. <絵が上手に塗れた> じょうずにやったー。(8)
- b. <観察者：(お絵かきの)葉っぱ緑で塗る？茶色で塗る？> きれーにやるー。(9)
- c. <先生が作った作品を見ながら観察者に説明している>
*おほしさま せんせい じょうずー(に)やったの、みーて。(11)
- d. <観察者に色を塗るよう頼む> *ぬってここきれい(に)、ぬってきれい(に)、はやくー、はやくー。(14)
- e. <描いた絵の説明> わたしたくさんかわいい。あしたわたしね Jちゃんみたいぬったやー、ねー。かわいい、これねー、だっておねえさんだもん。(15)
- f. ちょっとしずかにして、おわらないから。(15)
- g. <塗り絵> きれいにぬーる。かみのき(髪の毛)どんないろにする？(15)
- h. <先生：いっぱい(ゴミが)残ってます> どっこにー？きれいにしてやる。(18)

3-3-2-3 「イ+くする」構造の結果

「イ+くする」構造は14ヶ月日以降に断続的に観察されるようになった⁽⁶⁾。適格な発話の他、「に」の過剰使用やイ形容詞を活用させない誤りも見られた。(11)は発話例である。

(11) 「イ+くする」構造

- a. <観察者：(砂の)トンネル(を大きく)できる？ 友達：まだできない> これ(シャベル)でここにやるよー。だってこーんなにおおきくやればいいじゃんねー。これピカってやるじゃんねMちゃん。まだおおきいじゃないなー。(14)

- b. <煎餅を牛乳に浸す>こうやってやるの。*だーって これのほうが おいしいやる。(17)
- c. っていうか、つめたくするんだもん。(20)

また、K児には(12)のように形容詞「(～が)ない」や否定語「(～じゃ)ない」を用いた発話も観察された。(12a)では「に」の過剰使用が(例：*なくにする)、(12b)では適格な表現と同時に誤りが見られた(例：～じゃなくしちゃった、*～じゃないにしちゃった)。これらの例からは、K児がイ形容詞の活用方法や「に」の有無について試行錯誤しながら発話している様子が見えてくる。

(12) 「イ+くする」構造：「ない」を用いた発話例

- a. <コップが机上の遠い所に置いてあるので、今日は牛乳を飲むのは無しにしたい>
*な-く-に-する。(18)
- b. <積み木で部屋を作りながら> プールプール これじゃなくしちゃった。*やっぱプールこれじゃないにしちゃった。やっぱそれプールじゃない-。これがプール。(20)

3-3-2-4 「動+ようにする」構造の結果

「動+ようにする」構造は19ヶ月日以降に2例観察された。同構造の出現時期は他の構造の出現時期(「名+にする」7ヶ月目、「ナ+にする」8ヶ月目、「イ+くする」14ヶ月目)に比べて遅かった。誤りは観察されなかった。(13)は同構造の発話例である。

(13) 「動+ようにする」構造

- a. <絵を描きながら> あかちゃん、こんどはみえないように ヒューヒューやって。(19)。
- b. みんなのテーブル くっつかないようにしよう。(20)

3-3-3 Y児、K児の誤りの特徴

Y児とK児には「～する」構造でいくつかの誤りが観察された。ここでは、彼らの誤りについてまとめたい。表4は彼らの誤りを構造別に記したものである。

誤りの主な特徴として、「名+にする」「ナ+にする」構造で「*φ」が観察された点、そして「イ+くする」構造でイ形容詞の活用の誤りと「に」の過剰使用が観察された点があげられる。「イ+くする」構造では誤りの種類も多く、イ形容詞の活用に関する誤りには「*語幹+する」「*い+する」の2種類が、過剰使用の誤りには「*い+にする」「*く+にする」の2種類があった。このように、「イ+くする」構造で誤りが多く見られたことは、同構造の習得が「名+にする」「ナ+にする」構造に比べて容易ではなかったことを示していると思われる。

表4 Y児とK児の誤り

	「名詞+にする」	「ナ形容詞+にする」	「イ形容詞+くする」
Y 児	「*φ」	—	イ形容詞の活用の誤り (「*語幹+する」「*い+する」) 「に」の過剰使用 (「*い+にする」)
K 児	「*φ」 「に」の過剰使用	「*φ」	イ形容詞の活用の誤り (「*い+する」) 「に」の過剰使用 (「*い+にする」「*く+にする」)

誤りが観察された一因としては、彼らにとって語彙の品詞の識別が困難であった点や、各品詞に対応した「～する」構造の規則の習得が困難であった点などが考えられる。彼らは同構造の文法を教科書や先生などから明示的に学ぶことはなかった。また、日本語の語彙には例えば「大きい」「大きな」や「グチャグチャな」「グチャグチャの」のように品詞の区別が明確でないものもある。自然習得環境の中で品詞の種類を適切に判断し、「に」が必要か否か、あるいはイ形容詞を活用させるか否かといった規則を学んでいくことは、彼らにとって容易ではなかったと推測される。

3-3-4 Y児、K児の「～する」構造習得の特徴

以上の結果を基に、Y児とK児の習得の特徴について考えたい。3.3.3でも触れたが、「～する」構造習得には、品詞を識別できることと格助詞「に」が適切に使用できることが重要であると考えられる。そこで、「に」の出現状況に焦点を当て、同構造の習得の特徴について考えたい。表5、表6はY児とK児それぞれの各構造における「に」の出現の有無を時期別に示したものである。表中の「●」は適格か不適格かに関わらず「に」が出現したことを表す(例：これにする、*小さいにする)。「○」「△」は「に」の出現がないことを表す。このうち「○」は本来「に」が必要でない「イ+くする」構造の場合(例：小さくする、*小さいする)、「△」は本来「に」が必要だが「*φ」の場合(*これする)である。これらの記号はいずれも各月1回以上観察された場合に記した。

まず、「名+にする」構造の場合、両児共に、習得の最初期に「*φ」のみが観察される時期があった(Y児は7～10ヶ月目、K児は7ヶ月目)。その後「に」が出現するものの「*φ」は消失せず、「に」と「*φ」とが混在していた。「に」の出現がなく「*φ」のみが使用されていた時期に、彼らは「～する」構造以外の用法で既に「に」を使用していた⁷⁾。また、当地域で「名+にする」の「に」が省略されることはなく、両児が周囲から「*名+φ+する」を耳にする可能性も低い。さらに、彼らのL1であるポルトガル語では「名+にする」構造の場合、動詞の種類によって前置詞を伴う場合もあり、初期の段階から「に」が出現する可能性も否定できない。それにもかかわらず、まず「*φ」のみが観察されたことから、彼らはこの時期、「に」という音形は知っていたものの、同構造で「に」を使用することがまだ認識できていなかったと推測される。

表5 Y児の「に」の出現状況

構造\月数	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
「*名+ ϕ +する」	-	-	△	-	-	△	-	△	△	△	△	-	-	△	-	-
「名+ <u>に</u> する」	-	-	-	-	-	-	●	-	-	●	●	●	●	●	●	●
「ナ+ <u>に</u> 」	●	-	●	●	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-	-	-
「ナ+ <u>に</u> する」	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-
「*い/語幹+する」「イ+くする」	-	-	○	-	-	-	-	-	-	○	-	-	○	○	○	○
「*い+ <u>に</u> する」	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	-	-	-	-

表6 K児の「に」の出現状況

構造\月数	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	
「*名+ ϕ +する」	-	△	-	-	△	△	△	-	△	△	△	-	-	△	△	
「名+ <u>に</u> する」「*名+ <u>に</u> する」	-	-	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	
「*ナ+ ϕ +する」	-	-	-	-	-	△	-	-	△	-	-	-	-	-	-	
「ナ+ <u>に</u> する」	-	-	●	●	-	-	-	-	●	●	●	●	●	●	-	●
「*い+する」「イ+くする」	-	-	-	-	-	-	-	-	○	-	-	○	-	-	○	
「*い+ <u>に</u> する」「*く+ <u>に</u> する」	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	-	●	
「動+よう <u>に</u> する」	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	●	●	

「* ϕ 」については、これまでL2の格助詞の習得研究において、誤りの一形態であることが指摘されている(松田・斎藤1992、久保田1994)。さらに、L2の幼児や児童を対象とした格助詞の習得研究でも、「* ϕ 」が発達段階の最初期に見られるという報告がある(久野2003、2005、白畑・久野2005、2008)。これらの研究では、ある文法項目でOCが初出した時に「* ϕ 」が観察される例や、「* ϕ 」とほぼ同時期あるいは「* ϕ 」より遅れて格助詞が出現するという例が報告されている。さらに「* ϕ 」は格助詞の出現後も続くという。本対象児の場合もOCの初出時に「* ϕ 」が観察され、さらに「に」出現後も「* ϕ 」が観察され続けた。このことから「名+にする」構造の習得では、これまでの格助詞の習得研究に見られるように、まず「* ϕ 」が観察される時期があり、その後「に」が徐々に発話されるようになっていくという特徴があるのではないかと予想される。

次に、「ナ+にする」構造の場合について見てみる。Y児(表5)には5ヶ月目から「しずかに」が観察されていた。しかし、この時期に他の構造がまだ観察されていないことや、この表現が先生や園児達によってよく用いられていたことなどから、Y児がこれを1つのまとまった表現として覚え、用いていた可能性も否定できない。一方、動詞「する」

を伴う「ナ+にする」(例：しずかにする)に限って見ると、「に」の出現時期は両児共に「名+にする」構造で「に」が出現したのと同時期かあるいはそれ以降であった。また、K児には「に」の出現後も「*φ」が観察され、「に」と「*φ」とが混在していた時期があった。このような特徴は「名+にする」構造でも見られることから、「ナ+にする」「名+にする」両構造の習得の特徴は類似している可能性があると考えられる。

最後に、「イ+くする」構造の場合、「に」が過剰使用され始めた時期は、両児共に「名+にする」「ナ+にする」構造で「に」が出現してから数ヶ月後のことであった。このことから、おそらく彼らは「名+にする」「ナ+にする」構造で「に」を用いることを認識するようになり、「イ+くする」構造でも「に」を用いると類推し、その結果「*〜くにする」「*〜いにする」という過剰使用になったと思われる。したがって、「イ+くする」構造で観察された「に」の過剰使用は、「〜する」構造の習得過程における発達上の誤りであると考えられる。

4. おわりに

ブラジル人幼児2名の発話データを基に、「〜する」構造について発話例を示しながら習得の特徴を調査した。その結果、主な特徴として以下の点が明らかとなった。

(14) 「〜する」構造の習得における特徴

- a. 「名+にする」構造の場合、両児共に習得の最初期に「*φ」のみが観察され、その後「に」が使用され始めるものの、「*φ」も混在する時期が確認された。また、K児には「に」の過剰使用も観察された。
- b. 「ナ+にする」構造の場合、Y児には「しずかに」という発話が早期から観察されたが、動詞「する」を伴う発話に限って見れば、「に」の出現時期は両児共に「名+にする」構造で「に」が出現して以降のことであった。また、K児には「に」出現後に「*φ」も観察された。
- c. 「イ+くする」構造の場合、両児共にイ形容詞の活用の誤りや「に」の過剰使用が観察された。「に」の過剰使用が観察され始めた時期は「名+にする」「ナ+にする」構造で「に」が使用されてから数ヶ月後のことであった。
- d. 「動詞+ようにする」構造はY児には観察されず、K児にのみ観察された。その出現時期は他の構造に比べて遅く、19ヶ月目であった。

これらの特徴のうち(14a)は、格助詞の習得の最初期に「*φ」が見られる点、そして格助詞出現後も「*φ」が混在するという点で、久野(2003、2005)や白畑・久野(2005、2008)と類似点が見られた。また、(14a)(14b)の特徴については、「に」出現後も「*φ」が混在していることから「に」の定着がよくないと言え、その点で西村(1987)の報告と類似しているとも考えられる。このように、格助詞「に」に関しては先行研究といくつかの類似点が見られたと言える。ただし、(14c)(14d)の特徴についてはこれまでほとんど報告がないことから、本調査で新たに明らかとなった特徴であると考えられる。本調査結果は、幼児2名による事例ではあるが、これまでほとんど研究されていない「〜する」

構造の習得過程を体系的に明らかにする上で、何らかの示唆を与えるものと思われる。今後、さらに事例調査を重ね、習得過程の解明に努めたいと考える。また、変化を表す「～なる」構造の習得過程との関連を調査することも今後の課題である。

【注】

- (1) 当該文脈での不適格な表現には「*」を付した。
- (2) 「くちゃくちゃ」「ぺちゃんこ」などの品詞については久野（2005）の分類基準と統一し、名詞として扱った。
- (3) comは「で」など、emは「に」などを表す前置詞である。aoは「に」などを表す前置詞aと定冠詞oとの縮合形である。また、vouで始まる例文の主語は「私は」である。
- (4) 表中の各構造内での項目（例：「*名+ ϕ +する」、「名+にする」）の順序は発話時期の早い順である。
- (5) Y児には8～13ヶ月目に「はやくして」のような発話が何度か観察されていたが、これらは相手に対し何かの動作を急かす意味で用いられていたため、分析の対象としなかった。
- (6) Y児同様、K児にも、動作を急かす意味で「はやくやって」などと発話した例が7ヶ月目以降観察されていた。また、15ヶ月目には友達に「速く塗らないでほしい」という意味で「*Jちゃん、はやいにしてないよ。はやくやらないでやー。」と言っており、「～する」構造での「に」が様態の副詞としての用法にも影響を与えている可能性があると思われる。
- (7) Y児には5ヶ月目に「(セミは) え、どこ？どこにいるの？」という発話が、K児には7ヶ月目に「<ごみを指差しながら> あそこにある」という発話が観察されていた。

【参考文献】

日向ノエミア（1994）『ローマ字和ポ辞典』柏書房

久野美津子（2003）「ブラジル人幼児の場所表現「に」と「で」の習得過程」『日本語教育』117号、83-92

久野美津子（2005）「ブラジル人幼児2名による変化を表す「～なる」構造での誤りと習得過程」『日本語教育』127号、31-40

生田守・久保田美子（1997）「上級学習者における格助詞「を」「に」「で」習得上の問題点—助詞テストによる横断的研究から—」『日本語国際センター紀要』第7号、17-34

ジャイメ・コエリョ・飛田良文（編）（1998）『現代日葡辞典』小学館

久保田美子（1994）「第二言語としての日本語の縦断的習得研究—格助詞「を」「に」「で」「へ」の習得過程について—」『日本語教育』82号、72-85

松田由美子・斎藤俊一（1992）「第2言語としての日本語学習に関する縦断的事例研究」『世界の日本語教育』vol.2、129-156

西村よしみ（1987）「助詞のCAI教材について—動詞を核とした助詞の指導」『日本語教育論集』3、筑波大学留学生教育センター、49-74

白畑知彦・久野美津子（2005）「L2児童による日本語名詞句構造内での「ノ」の習得」

Second Language 4, 日本第二言語習得学会、29-50

白畑知彦・久野美津子 (2008) 「中国人児童による日本語格助詞の発達過程の記述—来日後4ヶ月間の記録—」『静岡大学教育学部研究報告 (人文・社会科学篇)』第58号、143-158

竹中理恵 (2001) 「タガログ語を母語とする児童の発話における助詞の使用実態—1年間のケーススタディを通して—」『南山日本語教育』260-299

寺村秀夫 (1982) 「「変える」表現—働きかけと変化の複合」『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版、124-126

寺村秀夫 (1991) 「述語を主とする主従的結合—連用」『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版、266-289

A Preliminary Investigation of the Acquisition of the *suru* structure by Brazilian Children

HISANO, Mitsuko

The purpose of this paper is to investigate the process through which younger L2 learners acquire the *suru* structure which indicates that someone turns something into a certain state, or someone expresses decision. The conclusions are drawn from the data obtained from the spontaneous speech of two Brazilian children, observed over a period of 20 months.

The results show as follows: (a) In the case of the [noun + *ni* + *suru*] structure, they omitted *ni* in the early stage of language acquisition, and later they continuously produced *ni* along with the ungrammatical structure [noun + *suru*]. Furthermore, overuse of *ni* was observed. (b) In the case of the [*na*-adjective + *ni* + *suru*] structure, *ni* was sometimes omitted. (c) In the case of the [*i*-adjective + *kusuru*] structure, mistakes of declension of *i*-adjective and overuse of *ni* were often observed. *Ni* was incorrectly added to this structure after they used *ni* correctly in the [noun + *ni* + *suru*] and the [*na*-adjective + *ni* + *suru*] structures. (d) In the case of the [verb + *youni* + *suru*] structure, the first appearance of this was later than other structures.

Judging from these results, there seems to be a close relation between acquiring the *suru* structure and acquiring the case particle *ni*. It appears that Brazilian children had some difficulties in distinguishing between Japanese Parts of Speech and learning conjunctive rules appropriately.